

別表(1) 賃金出来高表(歩増)

三川開発仕組 一方平均額 (三池労組員のみ)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
51年	3,177円	3,172円	3,175円	3,242円	3,188円	3,206円	3,188円	3,269円	3,218円	3,272円	3,428円	3,405円
52年	3,392	3,357	3,419	3,386	3,397	3,401	3,338	3,342	3,407	3,553	3,710	3,857
53年	3,826	3,836	3,793	3,913	3,880	3,766	3,475	3,624	3,731	3,701	3,746	3,659
54年	3,690	3,629	3,676	3,671	3,694	3,756	3,774	—	—	—	—	—

注=10月から新賃金が展開される。

別表(2) 春闘賃上げ額 (1方当たり)

51年	392円
52年	458
53年	168
54年	150

賃金展開に監視の目を

手記提供 三川指導部第七分会労働部

毎年、会社・職制が行なう賃金展開に監視の目を光らせ、たしかに資料を武器に合理的な配分を実現するために闘っている。

職場分会有る。三川指導部の第七職場分会(田口芳博分会長)が、それである。次は、同分会の労働部から寄せられた手記。

資料を武器に闘おう

炭鉱の賃金ほど複雑なものはない、とよくいう。まったくその通りである。

給料を受けてみない限り、わからない。だいたいこのくらいでは、と想像上の計算はできるものの、はつきり自分の賃金の額をはきき出せない。

毎日働いた賃金なのに、苦勞したからといって、賃金が多いわけでもない。

ところで、毎年十月になると賃金展開が行なわれる。その年の春闘で闘った分の具体的な配分についてであるが、それまでは一日幾らくになるかのR計算によって、出勤日数に乗じて上積みされて行くが、いざ十月の賃金展開後になると、落ちこんでしまうのが常だ。

別表(1)を参照してもらえばわかるが、この表は、三川指導部七分

会の開発仕組(昭和五十二年七月以前)と三川と部内統合。それ以前の資料は、元宮浦の開発仕組の分。労働部の調査でわかった、出来高給表である。

また、別表(2)は、春闘で闘い取った賃金である。

さて、展開されていく十月分の出来高給を見てみると、たとえば昭和五十一年度の場合、賃金の九

から抗議を行なうと、十一月からは賃金があがってきた。こんな調子なのだ。

五十三年度からは、元宮浦の職場は三川と部内に統合された。すると同一職場となったはずなのに、その差をみせつけられた。あんなに、強く交渉を重ねる結果となった。そのおかげで、なんと元にもどった思いである。

一方、会社が減産体制をとりはじめたため、支給される賃金も、たとえ、一万五千円という少い賃上げではあったにしても、展開

四山災害、何が原因か?

改まらぬ保安手抜き

繰り返された同じ事故

本紙前号で伝えたように、四山鉱では九人の労働者が重傷を負うほどの重大災害が起きたが、はたして原因はどこにあるのか。

ここに同鉱坑底からの、率直な報告(片山末吉さんレポート)を紹介する。

手記

本紙前号で伝えたように、八月十一日の四山鉱における重大災害(重傷九人、うち入院四人)については、職場分会が統一して抗議したが、その後の調査などにより、会社側の、きわめて初歩的な保安の手抜きがあったことが明らかとなった。

三池労組としては、保安担当者会議や中央執行委員会対策を協議、現場での抗議行動に合わせ、会社の保安責任をあくまで追及していくことを確認した。

以下は、四山鉱坑底からの報告である。

本紙前号で伝えたように、七月の六日から、すでに百六十八メートル進行していた。その時点で、いきなり下盤に壁が崩れ、私のパンツァーコンベアが三十五メートルにもわたって、天井に向かかって一瞬のうちに一メートル近くも押し上げられた。同時に炭壁がくずれ落ちた。この、重なる事故により犠牲者を出してしまっただけである。

ところで、その徴候であるやま鳴りは、すでに二三日前から起きていた。事実、八月十日には、「ダーン」という大きなやま鳴りと同時に、パンツァーコンベアの

徴候は数日前からあった

事故が起きた四山鉱の本層は炭文が四メートルもあり、将来は上下段別々に掘をセットし、まず上段にセットされた上段掘を先行しながら、採掘を行っていた箇所である。

シヤピンが切れているのだ。したがって、対策を講ずるために、少くともそのとき一時石炭採掘を中止してさへいけば、当然防ごうとした事故だった。

同じ性質の災害が以前にも

四山鉱は、昭和五十二年の十一月三十日、すでにこの場合とまったく同様の災害をひき起こしている。採掘炭質の柏木俊二さん(当時21歳)が、そのため悲惨な死を遂げ、ほかに重傷者三人を出した。

場所は、同鉱の上層三十五添卸の掘で、やま鳴りを伴って突発したやまはねのため、いきなり吹き飛ばされ、そのまま石炭の下に埋まっての犠牲者だった。

その後四山鉱では、保安対策として、この種の突発事故を未然に防ぐために、掘面に並行して放圧坑道を開通したり、また放圧ボーリングを行ったりしてきた。その尊い経験をもちながら、今回はそのような措置がまったくとられていなかった。そこに、重大問題が横たわっているのである。

会社は、年間三池炭産で二十万トン石炭を減産する、という口実で、ついに今春労働者に合理化を押しつけたばかりのはずであ

三川鉱の坑内環境に去る体力

大金をはたいてサウナ風呂にゆく人あり。もったいない。一度三川鉱の熱い坑内で仕事をしてみなさい、といいたい。全身から汗がどっと吹き出し、あつい暑い。氷水のうまさったら、ビール以上。おまけに多少すくないが、賃金の補償もちゃんとある。

かわら版

田原坂 替えろた
照れば炭塵
雨降るやどる田
車上苦しい
運転士

港務指導部新聞「みち湖」(八月六日発行)から。

三川指導部第七分会新聞「あせ」(八月二十七日発行)から。